
IS **インフィニットストラトス** - ANOTHER・WORLD -

現 実 逃 避

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニットストラトス - ANOTHER・WORK
LD -

【Nコード】

N0113R

【作者名】

現実逃避

【あらすじ】

男でISを起動させることの出来る織斑一夏。
彼の前に2人目のISを起動させることのできる少年が現れた。
光と闇を具現化した学園バトルラブコメがスタート！

紹介

とある刹那の金剛氷結の作者が調子に乗りすぎて書いてしまった一作。

果たして読んでくれる人はいるのか！？

簡単な説明をしてしまうと織斑一夏とは別にもう1人、ISを動かすことが出来る男が現れた。

その男が主人公であり、織斑とは違ったダークヒーローのような存在。

しかし次第に織斑一夏に引き込まれ・・・！！？

そんな夢のような世界が今、扉を開ける！！

あ、それとメイン攻略はシャルにする予定です。

希望があればそのキャラとのサイドストーリーを書こうと思います
(大体1〜2話で仕上げる予定)

詳しい内容が書いてあればその内容になるべくそって書いていきたいと思っています。

18禁はお断りです。

ご愛読お願いします！orz

紹介（後書き）

ご愛読お願いします！

プロローグ（前書き）

どうも～現実逃避です～

本当になんでこんなことしたのか分からない・・・（脳裏に浮かぶ衝動：主「シャル可愛いよ～！！シャルアアアルウウ！！！！！！

（ゴロゴロゴロ・・・硬くて冷たい床を転がる音）そうだ・・・自分でかけばいいんだ・・・）

どうしてこうなった。

でもやってみたかったんでやることにしました！

読んでくれると嬉しいです！

プロローグ

俺は……この世界が嫌いだ。

女は敬われ男は犬のような扱いを受ける。

それも全てISの開発によって起きたものだ。

ISとは、女性にのみ動かせる機体であり現存するどの兵器も歯が立たなかった最強の兵器。

しかし、今では競技用にされているがその装備は戦争で用いても完膚なきまでの制圧が可能だ。

そう、男では動かせないはずだった。

ニュースで臨時と大きく宣伝され、写されたのはとある少年の顔写真。

内容はISを起動させたためIS学園への強制入学。

そんな内容だった。

そして。

俺もまた……その少年と同じ。

ISを起動させてしまった男だ。

薄暗い部屋。

冷たい風。

無音の空間。

湿った匂い。

何もかもがいやになる空間だった。

そんな空間に一斉に明かりが灯された。

「・・・っ!」

明かりをつけずに何分も待たされていたためその明かりが目に入るとまぶしくてたまらない。

『では、これよりIS専用機日本作成機、第3世代 - ソウケイジユウ 狙鷹銃 - の起動を開始します』

アナウンスに従いチェックを済ませてください。

そついう研究者の声が聞こえ、目の前のモニターに情報が表示される。

起動を確認。

この機体を現搭乗者のみ干涉可能に設定、外部からの干涉、強制解除を無効化します。

初期化には数日を催す可能性があります。

装備の確認をしてください。

「2丁型拳銃：ガンホーク、脚：スカッド」

たった、これだけ。

しかし、第3世代にもなればこれだけの装備で十分のはずだ。

それに、まだ初期化は完了していない。

追加装備だってあるはずだ。

『全てチェック完了、これより射撃テスト、ならびに足技からの射撃、第2世代量産機との模擬戦を行います』

そのアナウンスが成り終わると数十M離れた場所に不規則な感覚をあけて的が現れた。

『射撃を開始してください』

その一言で停止していた的が不規則に動き始めた。

「あれをぶっ壊せばいいのか」

マニュアルに書かれた用にやってみる。

「武器を呼び出し、握るような感覚・・・か」

来い・・・ガンホークっ！

心の内で武器の名を叫ぶとその両手にはリボルバーが握られていた。

「リボルバーか・・・使いにくいものを選びやがって」

リボルバーの特性は貫通性能に長けている、弾丸が通常のハンドガンよりも大きい。

それに比べてデメリットはリロードの遅さ、次弾装填のシリンダーギミックの関係で連射とは呼べないこと。

「だが・・・慣れればいい話だ」

リボルバーをくるくると指にかけて回しガンアクションを行う。

そして。

リボルバーのグリップを握り引き金を引き続ける。

ダン！ガン！ガン！タン！ガン！ダン！タン！

7発。

全ての的に直撃し、的は停止した。

「残りは5発・・・」

左手に2発、右手に3発残っている。

『では次に近接格闘を行います』

そうアナウンスがかかると今度は大量の的が360度全方面を囲った。

これを足技だけで壊せ、ということだろう。

「・・・はっ！」

振り上げた右足が的を破壊する。

そのまま左の軸足を捻りつき伸ばしたままの右足でなぎ払う。

残り、25の的。

ダン！と振り回した右足を地面に叩きつけて左脚を浮かせる。

右手で支えを作り左足と右足を広げて蹴りまわす。

俗に言うウィンドミルだ。

軸は右腕のみ。

そして、回転を終わらせ、右腕に力を込めて、地面を蹴る。

空中に浮いた状態でサマーソルトを行う。

さらにすばやく、重い蹴り、空間干渉を起こしてダメージを与えるショットを行う。

ショットは目標、または障害物に着弾すると圧縮された空間面積の余波が全方向へ襲う拡散する蹴りなのだ。

『目標完全に破壊を確認、これより模擬戦闘を始めます』

後ろの大扉が開き、中から打鐘が出てくる。

顔はマスクに隠されているが女であることは明らかだ。

「・・・・」

ドウ！ と何も言わずに瞬間加速をして一気に間合いを詰めてくる打鐘。

しかし、それは無謀なのではないか。

「甘い」

近づいてきたところでウィンドミルを行い何度も蹴りを叩きつける。

ショットの能力、それは足技になれば空間に関係なく行えるという能力だ。

つまり空中に浮いた状態でもウィンドミルは行える。

さらに・・・・一定のシールドエネルギーを使用することにより足技の応用時に追加ダメージが加えられる。

「ほれ、もう一発お見舞いだ」

今度は両手で地面を蹴り上げ両足をそろえた蹴りを当てる。

「・・・・・・！」

体勢を崩された相手は2、3歩下がる。

俺は空中に浮いたまま体を一回転させ両手にガンホークを握り、全ての弾丸を発射する。

ダン！タン！ガン！ガン！ダン！タン！タン！ガウン！ダン！ガン！タン！ガン！カチツカチツ。

そのまま空中で浮く。

「（目線でリロードの命令）」

ガンホークに目を向けると自動装填をしてくれた。

これはすごいと思う。

そして。

「あっけないな」

瞬間加速による加速の影響を受けた踵落としが模擬戦闘終了を続けるブザーを鳴らした。

「結果発表するわね・・・射撃A、足技A、模擬戦闘SSよ」

「んだよそりゃあ」

なぞの採点方法に言葉を返す。

「あなたは十分第3世代機にのるだけの資格があるってことよ」

・・・。

この機体の特徴は射撃と足技の両方を上手く使う戦場変換リーダーシップだったと思うが。

戦場変換、それは自分が最初に突入を行いある程度の目標を鎮圧させて状況を強制的に有利な立場へと変えてしまう。

「嬉しくもないね」

「そう言わない・・・あなたも選ばれたんだから・・・」

本当にこんなことがあるなんて思いもしなかった。

男がISを動かしてしまうなど・・・。

「はいこれ」

書記から手渡された紙袋にはどこかの制服が入っていた。

「んだよこれ」

どこかで見たことがある・・・。

これは・・・。

「IS学園の制服よ」

やっぱり。

「改造が自由だから自分のやりたい服装にしてみなさいな」

あとこれも、そう言われて渡されたのが灰色と黒の混じったチエーンだった。

ベルトに引つ掛けるものだろうか。

「これは？」

「ISのコアを具現化したものよ」

それでこれか・・・。

まあいいんだが、と俺は呟いた。

「もう時間もないし早い内に改造しなさい、いやならそのままでもいいのよ」

結果。

襟を少しだけ立たせて、ズボンの裾を長めにしてもらい、背中に刺繍で鷹とリボルバーをいれてもらった。

腰の位置にはベルトにチェーンが掛けられるようにしてもらった。

右側につけているので一種のおしゃれにしか見えない。

しかし問題は。

「いつから入学だよ」

「明日」

即答しましょう、陰○師！

「は、え？明日アアアアア！！？」

あまりに急すぎて思わず叫んでしまった。

「そ、明日から」

んじゃ頑張ってねん、とだけ言われて地下から地上へとあがった。

「明日か・・・」

それは不安と、楽しみ、2つの感情が交わり不思議な気持ちになった。

こうして、俺には一生忘れることの出来ない長くて短かった学園生活が始まった。

プロローグ（後書き）

まあプロローグにしちゃあ長いなどか言わずに（言っても知りません）見てくれてありがとうございました。

キャラクター名は後日書き込もうと思います。

入学は大波乱！？（前書き）

まさかブログ書いてる間に感想かかれてるとは思いませんでしたねえ。

まあそれはさておき、学園に入学からのスタートです！

ご愛読願います！

入学は大波乱！？

俺は・・・この世界に興味を持ってない。

ISが世界中に発展し、この世界は女尊男卑の世界になった。

ISは男には動かせない、そんな世の中の定義を壊したのが、織斑一夏と、俺だ。

俺たちは男であるにも関わらず、ISを動かしてしまった。

そのため、IS学園に強制入学を強いられることになった。

今、目の前の扉の奥から声が聞こえる。

「それでは、転校生の紹介をします」

どうぞ、と言われ俺は教室の扉を開けた。

そこには。

分かりきっていたことだが、大量の女子がお出迎え。

教壇の前まで歩いていくとより一層女子が見えてしまう。

成れない光景に息を呑みながら、言葉を紡ぐ。

「なるかみ かげと為咬陰斗です・・・よろしく」

自己紹介を自分では終えたつもりだが、そのクラスの子は目を輝かせている。

なんだ、そのほかには？ 的な期待の眼差しは。

イイゼ！ お前たちが俺の続きを聞きたいって言うんなら！ まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！

「以上です」

それだけ言うと全員から2〜3人抜いたくらいの子が全員ガタン！ と椅子から落ちた。

そして担任？ か分からない眼鏡を掛けた緑色の髪の教師に案内された席は、一番後ろの窓際。

ここはいい席だ、と思えたのを2〜3分のうちだけだった。

HRの最中だが、ここの席って死亡フラグじゃね？ とか思えてきた。

もし仮に女子が大量に押しかけてきたとしよう。

逃げられなくね？

ナンテノ（＾q＾）＼コッタイ

「それでは、1時間目は合同練習なので急いでくださいね、特に男子2名は第3アリーナの更衣室を使うので急いで移動してくださいねー？ 解散してください」

それだけ言つと例の男子、織斑一夏が立ち上がり俺のほうに向かって歩いてきた。

「織斑一夏だ、よろしく」

手を差し出してきたので同じく手を差し出す。

握手をして、すぐにそのまま引つ張られて教室を出る。

そして、廊下で……。

「あーいた！噂の男子転校生！」

「しかも織斑君と一緒に！」

ドドドドドドドド という効果音が似合うような勢いでこちらに向かって走ってくる。

殺気じみた迫力に思わず一步後ろに下がってしまった。

そこで織斑一夏が強制的に引つ張り、女子の群れを潜り抜けてなんとか更衣室にたどり着いた。

「……いつもあんな感じなのか？」

「ああ」

こりゃあ精神が死ぬなあ……。

そんな先のことを考えていたら織斑一夏に中断された。

「早く着替えないとまずいぞ、特に千冬姉が指導してるからなあ」

「ああ、そうだな・・・って千冬姉？」

俺も着替えながら質問をする。

「ああ！悪い！あとで説明するから！」

姉弟なのかなあ・・・。

着替えを終わらせ、アリーナに集合する。

「ではセシリア、織斑、それと、為咬、専用機の展開を行ってみろ」

「はい！」

そう言うのとセシリア「オルコット」とかいいうイギリスの代表候補生が第3世代ブルー・ティアーズを展開した。

・・・どうでもいいがイギリスの飯は不味いんだが、あれは味付けをされてないからであり、イギリスでは自分で好きなだけ味つけて食えや、ということらしい。

「次、織斑」

「はい・・・あれ？」

織斑一夏はISを装着できてない・・・。

「何をしている、専用機持ちなら展開に1秒もかからないぞ」

そう忠告され、それに反発するように応える織斑一夏。

「分かってるて」

展開をやつと完了させた織斑一夏を見て少し満足そうに口元を歪めている教師。

「次、為咬」

「へーい」

たしか、展開は呼び出す幹事だったんだよな……

心の中でそんなことを思いながら腰のチェーンに意識を集中させる。

来い、狙鷹銃……

次に目を開けるとISを装着していることが分かった。

「よし、次は空中を飛んでみる」

「はい！」

お先に、と一言残してセシリア・オルコットは空へと飛んでいった。

「よし、俺も……うおおわあ！」

飛ばうとしてバランスを崩して数十M先まで低空飛行をしたあとに

急上昇。

決まらないなあ……。

「んじゃ俺もか……」

轟！ と勢い良く空中に浮きそのまま空を走る。

「こんなに速度出るんだな……」

そう思っている中で織斑一夏のc hに通信が入る。

「遅いぞ織斑、スペック的にはお前の白式のほうが早いんだ」

そう注意されても織斑一夏は？顔をしている。

ダメだこいつ、早く何とかしなければ。

「ではセシリア、織斑、為咬、急降下からの着陸をやって見せろ」

「ではお二人方、お先に」

そう言い残し、セシリア「オルコットは急降下し、着陸を成功させた。」

「んじゃ俺も行かせてもらっぜ、織斑一夏」

そして急降下しようとしたところで止められた。

「あー、そのだな、一夏で構わない」

そうだなあ……フルで呼ぶの面倒だし……。

「おk、んじゃ先に行くぜ、一夏、俺のことはどっちでも構わない」

それだけ言つと今度は完全に急降下を開始する。

キイイイイイン！ と大気との摩擦音が耳に響く。

地面に脚が届く距離で着地を決める。

はずだった。

「うおおおおおおお！？」

後ろから、否、頭上から何かが突進してきて地面にねじ伏せられる。

「い……一夏………テメエ………」

グランドに穴を開けるほどの衝撃をモロに受けた俺はISを強制解除してしまい痛みがモロに伝わる。

「このばか者が……誰がグランドに穴を開けると言った？」

そんな声が聞こえる。

なんというか。

「これから苦勞しそうだ……」

昼食。

案の定女子達に騒がれてまともに食事も出来なかった。

夕方。

寮へ到着し、中に入る。

そこには、一夏がいた。

「同部屋か・・・まあ当たり前だな」

そんなことをを呟きながらも一夏はお茶を淹れてくれた。

出されたお茶を飲みながら話をする。

「まだお前にもらったところが痛むぜ・・・」

「それは本当に悪かった！ゴメンな！」

思い出したかのように手を合わせて祈るような形で謝ってくる。

なんというかこっちが悪役みたいだ。

まあ俺はヒーロー、ていうよりも悪党のっぽが似合つと思ってるがな。

「まあ、別に構わないが明日も面倒なことばかりなんだろう？」

「ああ、そうだ」

即答とかマジ勘弁。

「んじゃ、俺は風呂に入るぜ」

落ち込む俺を置いて風呂に入ってしまった一夏。

これからが本当に疲れるんだろうな、と改めて確認させられた。

同時刻。

IS学園正門前。

「ここがIS学園ね・・・」

不適に口元を歪めて笑う少女。

その背中には大きな目的があるように見えた。

小さな、その背中に。

入学は大波乱！？（後書き）

はい、次回は皆お待ちかね、鳳 鈴音、通称鈴の登場だぜい
まあ頑張って書こうと思います。

転校生は顔見知り！？（前書き）

どうも、ゲンジツトウヒです。

とある刹那のほうなんですがい感じにネタ詰まりを起こしていて
上手く文が構成が出来ていないので先に話がまとまったこつちから
あげていききたいと思います。

・・・御坂と刹那をどうやって合わせるかなんだよな・・・。

転校生は顔見知り！？

朝。

それは心地よくもあり鬱陶しいものでもある。

「ん．．．．．あ．．．．．」

目が覚めた俺はとあることに気づく。

あー、そういえば昨日から一夏と寮生活だっけかあ．．．。

そんなことを思いながらベッドからを起こし顔を洗い、歯を磨く。

寝癖を直し、制服に着替えて、暖かいお茶を飲む。

「．．．ふう」

ずずず、と軽く音を立てて飲んだお茶はほんのりと乾いた喉を潤してくれた。

「ん．．．．．」

一夏がモゾモゾと動き出した。

目が覚めたか？

「．．．おはよう．．．．．陰斗．．．」

「ああ、おはよう」

そんなやり取りをした後に俺は先に行くから、と言い残し食堂へ向かった。

今朝の朝食は塩鮭に赤味噌の味噌汁、漬物にご飯、金平牛蒡といった日本食セットだ。

ちなみに、周りには大量の女子が群がっている。

20分程度で食事を終えて（女子の質問攻めに応えながら）教室に入る。

教室は普段よりも騒がしく、あちらこちらで騒いでいる女子の声に耳を澄ます。

「ねーねー、聞いた？2組に転校生が来たらしいよ」

「うつそ！？専用機持ちじゃないよね？」

そんな似たような会話が彼方あちこち此方から聞こえる。

「何を騒いでるんだ？」

「さあ？」

俺と一夏は会話をしようとしたところでセシリア・オルコットが割り込んできた。

「一夏さん、今度のクラスマッチ戦がんばってくださいね」

それに応えるように一夏もセシリア・オルコットと会話を始めた。

「ああ、なんとかやってみるよ」

そこで、1つ疑問が生じた。

「……専用機持ちのクラス代表って何人いるんだ？」

俺は思い切ってセシリア・オルコットに尋ねた。

「なあ、セシリア・オルコット」

フルネームはどうかと思うが初っ端から名前だけで呼ぶのは如何せん申し分ない。

「セシリア、で結構ですわよ、為咬さん」

「そうか、んじゃセシリア」

改めて名前だけで呼ぶと少しうれしそうに、誇らしそうに返事をした。

「なんででしょうか？」

この自信は……なんでも聞いてくれ、答えてやんよ、教えてやんよ……そう言った顔である。

「クラスマッチで専用機持ってるのどのクラスだ？」

「あーそれでしたら、4組、6組といった辺りでしょうか」

「その情報、古いよ」

不意に教室の外から声が聞こえ、自然的に体がそちらへ向いてしま
う。

そこには。

威風堂々たる姿で立ち尽くすツインテールの女子が立っていた。

誰もが啞然としてる中でその少女は告げた。

「2組のクラス代表、鳳鈴音よ！宣戦布告に来たわ！」

鳳・・・？どつかで・・・？

「あれ、お前鈴か！？久しぶりだなあー」

そう言つて一夏は席から立ち上がりその鳳という少女に近づいてい
く。

セカンド幼なじみだよと説明を受けてようやく状況を飲み込んだ。

しかし、すぐに織斑先生によって解散させられた。

「お前たち、何を騒いでいる？」

この人は鬼の教官とも呼ばれていたこともあり、とても怖い一夏の
姉なのだ。

「早く散れ、HRが始まる」

ガスッ　といい音を立てて出席簿が脳天にクリティカルヒットを極めた。

ふは、めっちゃくちや痛い。

そんなこんなで今朝のHRは終了し、ISの起動練習（合同）が始まる。

「着替えるの面倒だ・・・」

なんというか・・・しつくりこない・・・。

特注の奴でも作ってもらおうかな。

そんなことを考えながらも着替えを終えた俺と一夏は早足でアリーナへと向かう。

到着してからすぐに織斑先生の長ったるぐふう！！！！

有り難い出席簿アタックをもらった。

心でも読めるのだろうか。

「為咬、ダブルイグニッション2段加速をやって見せる」

現在の専用機持ちのなかでもこのダブルイグニッションを完全な形で出来るISは俺の狙鷹銃だけらしい。

俺のISのスタイルは接近と中距離の瞬時戦略変換戦闘による敵の混乱。

さらに初期化が完了すれば俺専用調整されるため新しい装備能力が解放されるらしい。

何でも絶対的の中という能力でシールドエネルギーの中でもっともダメージの被弾率が高い位置を表示してくれるらしい。

おっと、そろそろ飛ばないとな。

「分かりました」

ISのコアの具現化、銀と金の光沢を見せるチェーンに意識を集中させる。

来い・・・狙鷹銃！

パアアア と体が光に包まれ緑と黒、そして飾りに少しついたどす黒い赤が特徴のISである。

・・・まだ初期化も済んでないから使いづらい。

武装は脚の攻撃装備と中距離のリボルバー2丁のみ。

たった。

たったこれだけの装備。

しかし、それだけの装備でも十分に戦える。

話がそれってしまったが、俺は今ダブルイグニッションを行っている。

簡単に言えば瞬間加速を2回発動するだけ。
イグニッションブースト

2度目で自分の好きな方向へ意識を向ければ移動出来るらしいが、ここまで上手く出来るのは極稀らしい。

「よし、戻って来い」

呼びかけを受け、俺は機体を着地させる。

「では、これから織斑と為咬、お前たちは模擬戦をやってもらう」

模擬戦・・・ねえ。

勝てるのか、どうか分からない。

戦ったことのない相手だ。

「よろしくな、一夏」

未知なる勢力を前に胸が大きく高鳴った。

「おう」

両者ともにISの起動を行い、待機状態に移行する。

「では・・・はじめ！」

織斑先生の声が聞こえ両者がそれぞれ動く。

一夏は突進、俺は横へ瞬間加速。

そして早速から空きになったサイドへ弾丸を撃つ。

ガン！ダン！ガン！

弾丸をすぐに補充し、距離を取る。

しかし、そこで一夏を捕らえていたモニターが一夏の姿がブレたのを捕らえた。

「瞬間加速だ、俺も使えるんだぜ？」

そして、目の前に迫る一夏。

一夏の手には 雪片 が握られている。

「ぜらぁあああ！！！！！！」

ガキーン！！！！ とリボルバーを盾として扱い雪片を受け止める。

「……………甘いつ！」

脚の装甲についているスラストブースターを解放し、瞬間的に音速の域を超えた蹴り（マッハキック）が叩き込まれ、一夏のIS、白式が大きく揺れる。

さらに、もう片方のリボルバーで射撃を行う。

ダン！ガン！ガン！ガン！ この射撃に一夏は慌て、少しの時間を稼げた。

そこで回し蹴りを極めたが雪片で流される。

一夏は悔しそうに距離を取っている。

「こつちが攻撃になるぜー？」

瞬間加速を発動、急速的に接近した俺は流れる動きで一夏に狙いを定め、膝蹴り、マツハキック、空中で腕についているスラストブースターを作動させ体のバランスを保たせ、ウィンドミルを行い、そのままブースターの出力を上げ、両足をぴったりとそろえ、真直ぐに伸ばして、蹴り上げる。

そこからサマーソルトをして方向を整え、射撃。

ダガン！ガン！ダン！ガウン！ドン！ダン！

そしてもう一度瞬間加速を行い一夏の白式に体当たり。

左肩を盾にしているので心配はない。

そのまま、左肩についてる補助機能 ブラスト を使用する。

ブラストは装甲を開き、特別なエネルギー波を指定範囲（限度有り）に指定した出力を放出することが出来る。

指定エネルギー率・・・85%

ガアアアアアン！！！！

機械と機械が衝突するような音が響き、白式はまたグラウンドに穴を開けた。

白式のディスプレイにはシールドエネルギー切れの文字だけだろう。

しかし、一夏は本当に弱い。

もっともな戦い方が出来ないものなのだろうか。

こうして、午前の練習は終わった。

転校生は顔見知り！？（後書き）

ふう・・・・・・・・しかし疲れますね（学校が）

3年を学校から追い出すので精一杯ですよ^^；

まあ、刹那のほうも@少して内容が埋まるんで期待してくださあ

コール・オブ・デッド（死は呼ぶ）（前書き）

．．．．．刹那の文を考えるためアニメを参考にしてたら13話から見てなかったせいか思いっきり時間削られた。

拳句の果てアイデアすら思いつかなかった。

とあるを見ててISネタ浮かぶって何よこれ。

とあるの23巻発売が楽しみですねエ．．．。

コール・オブ・デッド（死は呼ぶ）

午後。

昼食を食べてすぐさまISの練習。

……ふむ。

「ブラストは出力が高いから良いんだが……なあ……」

その分エネルギーも削られる。

外せば終わり、当たれば強し。

諸刃の剣だ。

そうやって1人で悩んでいると鳳鈴音がやってきた。

「アンタが日本の代表候補生エ……？男じゃない……」

ピクッ。

今、こいつは俺の逆鱗に触れた。

男、という理由で笑われるのは好きじゃない。

ここで、こいつを謝らせてやる。

ISを戦闘モードへ移行させると鳳鈴音も同じくISを展開して構

えた。

「何？やろうつて言うの？アハハっ！バカねえ……日本と中国じゃどれだけ差があるか見せてあげる！」

「黙れパクリ文化……言葉は吐けば吐くほど重みが消えるぞ」

今、鳳鈴音のこめかみに血管マークが見える。

「もう……一回……言ってみなさい！」

鳳鈴音のIS、甲龍^{シェンロン}の両肩の装甲が少し空いたと思ったら、顔の真横を何かがカスった。

「衝……撃……砲……？」

カスった何かを確かめるように後ろを見ると地面に穴が開いている。

「ご名答」

続いて第2、第3射と連続で放ってくる。

「ちょ、ふざけんなあ！！」

少し調子に乗りすぎた気もするが男ならやらねばならぬ時がある。

イグニッションブーストで距離を急速に縮めて零距离での射撃を行う。

ところを青龍刀の返しで吹き飛ばされ、地面に両足と左手を使いブ

レーキを掛ける。

俺は諦めずにイグニッションブーストを行う。

また返して吹き飛ばされる。

ところだった。

「!？」

鳳鈴音も驚いている。

そりゃあそうだ。

「ダブルイグニッションを見るのは始めてかい？」

急速に接近し、2段目の加速で鳳鈴音の後方に移動。

そこから射撃を行う。

ダン！ガン！ガン！ダウン！ダン！チュン！

最後の一発が地面を抉る。

「図に乗ってんじゃ・・・ないわよ!」

ドッガアアアアアン!!!

「が・・・はあっ!!!？」

イグニッションブースト……じゃない……？

「ダブルイグニッション……未完成だけど一応使えるのよ」

フフン、と鼻で笑っている。

しかし、あの一撃で4分の1が消えたか……。

あれには気をつけないとな……。

俺は地面に叩きつけられ、盛大に転がった後、壁に激突し、停止した。

「んじゃ……これは見たことがあるか？」

そう言う俺のIS、狙鷹銃が少し光り、機体の周りに歪みを生み出す。

「これが何か分かるか？」

……新しく覚えた、というより創ったテクニックを試してみよう。

ちなみに今使ってるのは発動中は常にシールドエネルギーを消費するが、残像を生み出す技術だ。

これも敵に混乱を招くために使用された能力、クロウだ。

んでもって、新しく使うテクニックがダブルイグニッションの上、
トライアルイグニッション
3段加速だ。

これは3回目の加速でどうしてもコントロールできず、壁にぶつかってしまふ。

なんとか完成させなくては。

「うおおおおお……!!」

イグニッションブーストで急接近（＋残像付き）で鳳鈴音を叩く。

ガシャアアン……!!

蹴りの一発が甲龍に当たり、鳳鈴音の体が大きく揺れる。

もらった。

「クロウの発動を停止（裏コード……クロウの残像展開率を80%へ移行）」

ウン……と鈍い電子音が響き歪みが消えた。

正確には、歪みすら見えなくなった。

「さて、一気に行くぜ」

鳳鈴音が体勢を立て直すとそこには何も無い。

直後、後ろから大きな衝撃を受け、まともや揺れる甲龍。

「!?!」

数秒たってから衝撃を受けたその場所に残像が浮かぶ。

鳳鈴音はやけくそになったように残像に向かって衝撃砲を撃ち続けている。

さらに攻撃を加え、怯ませつつシールドエネルギーを削る。

最後のフィニッシュ（強攻撃）が叩き込まれ隙が生まれる。

「（クロウの発動を停止・・・さすがにこれ以上の使用はヤバイ）

」

エネルギー残量・・・167。

「これで終わらせる・・・」

脚の装甲に意識が集中し、スラストが発動した。

シュウウウウウ・・・

そんな音が薄らと聞こえるアリーナには以上な静けさを感じた。

「これが・・・俺の実力だ！」

ドン！

1回目の瞬間加速。

「直線的ね！」

あっさりと回避されるが、ダブルイグニッションでもう一度距離を詰める。

そこで青龍刀を連結させた武器を蹴り上げ、吹き飛ばした。

「あっ！」

武器を取られた鳳鈴音は悔しそうに一瞬口を歪めたがすぐに笑った。

キュウウウン…………

この音は…………。

ガアアアアン！！！！

衝撃砲が容赦なく俺の体を襲う。

実際はISの絶対防御で防いでくれるのだが。

シールドエネルギーが少ないせいか一部防ぎきれていない場所もある。

だが。

これでいい。

「トドメッ！」

そして放たれた衝撃砲は俺のISのシールドエネルギーを0にし、

勝利する。

はずだった。

直後、鳳鈴音の口元から笑みが消える。

「・・・いない？」

そう呟いた瞬間鳳鈴音の機体が悲鳴を上げる。

右肩の衝撃砲が破壊されたのだ。

「!？」

どこからの攻撃かも分からぬまま、アリーナを見回す。

「(どこにつ!?)」

詮索していると左肩の衝撃砲も破壊される。

「グガアアアアアア!!!!!!!」

瞬間的に目の前に現れた俺に驚く鳳鈴音は避けることもできずにマッハキックを受け吹き飛んだ。

壁に叩きつけられた甲龍の搭乗者、鳳鈴音は何も言わなかった・・・
というより言えなかった。

「ま、俺の勝ちだ」

ISをコアの具現化状態に戻すと地面に突き刺さった青龍刀が消えた。

何も言わずに俺はその場をあとにした。

夜。

「どうだ、何か分かったか？」

千冬はとある人物と話をしている。

「いえ・・・まだ特定は出来ていませんが・・・」

話相手は山田先生であった。

山田先生の前には大きなウィンドウとキーボード。

そしてそのウィンドウの中には昼にあった第3世代同士の模擬戦闘の写真。

「ふむ、本来なら、あのエネルギー残量でイグニッションブーストを使うことは出来ないはずだが」

さらに問題点がある。

イグニッションブーストは瞬間的な加速を行うだけのものだ。

常時加速状態にするものなどない。

それは狙鷹銃にインストールされている能力にも該当しない。

「一体なんだというのだ……?」

そこに映し出される大きな映像。

それは。

同時刻学生寮。

……あれはなんだったんだ?

昼の模擬戦。

あの時、俺は確かに衝撃砲を浴びるはずだった。

なのに。

避けることができた。

おまけに索敵センサーにも掛からないほどの速度で移動も出来た。

「見間違いだと思うんだが……」

「これは私の予想だが……」

千冬と陰斗は同じことを口にした。

「「ISが赤く光っているということは……狂戦士状態バーサーカーモードじゃないのか？」」

狂戦士状態というのは、日本のISに取り入れられたものでその性能を発揮することはほばないといわれている。

「そんなわけないよな……」

俺はそんな不安を押し殺すように顔を洗いに洗面台へと向かう。

「そんな……狂戦士状態って……」

「ああ、一度でも発動すれば安易に発動するようになる」

それに、と躊躇ためらって千冬は静かに告げる。

「アレは発動者を殺すシステムだ」

今では開発、及びインストールを一切禁じていたはずだが、と心なしか不安そうに言う。

その握り締めた手は汗をかいていた。

「不味いことになった……」

バシャッ!!

冷たい水が俺の不安を拭う様に沈んでいた心がサッパリする。

「はは・・・気のせいだよな・・・」

千冬は唇をかみ締める。

そして悔しそうにこらえた声で告げる。

「目が少しでも赤く光れば・・・せいぜい発動限界としても4回」

それ以上は・・・。。。。

「やめてください!」

そう言おうとしたところで山田先生の声にかき消された。

「私・・・そんなこと聞きたくないです・・・」

その声は少し震えていて、儚くモロい気がした。

「すまない」

静かに告げると千冬は部屋から立ち去った。

可笑しいかも知れないが自分の顔を見つめ、少し微笑んでみる。

「そうだ、気のせいだ」

寝るか・・・。

そう言って眠気に襲われた俺は重要なモノを見逃してしまった。

うつすらと目が赤く光ったということに。

狂戦士状態使用制限回数：4回

コール・オブ・デッド（死は呼ぶ）（後書き）

はい、これで陰斗に縛りをつけてみました。

狂戦士状態を簡単に説明しますと

- 1、強力な能力値をISに上乗せできる。
 - 2、センサーが反応しない。
 - 3、武装の強化。
 - 4、使用回数の限度有り。
 - 5、本人の意思、または命に危険を感じたときに強制発動が行われる。
 - 6、使用限度以上の発動をした場合は体に様々な悪影響を及ぼす。
- といったところですかね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0113r/>

IS インフィニットストラトス - ANOTHER・WORLD -

2011年3月13日16時14分発行